HELLO ハローインタビュー

SJ60特別インタビュー

SINGAPORE - JAPAN
DIPLOMATIC RELATIONS
1966 - 2026

アジア文明博物館・プラナカン博物館 館長
クレメント・オンさん

【プロフィール】
2007年アジア文明博物館に学芸員として入館、その後、上席学芸員、主任学芸員を経て2024年7月に両館館長に就任。

囲碁などの日本文化に造詣が深く、日本語も堪能なクレメント・オンさんにお話をうかがいました。
（取材日2026年4月16日）

聞き手
南十字星編集委員　編集部
西山ひろみ、黒田可奈

ー　クレメントさんは現在、“アジア文明博物館(以下ACM)”と“プラナカン博物館”の２つの博物館館長を兼任されていますが、その難しさなどがあれば教えて下さい。

クレメントさん　難しさ･･･そうですね。館長に就任してまだ2年弱なので、同僚や省庁から学ぶ日々ですが、特に企業経営のように、博物館の支援者の方々と協力して資金調達をすることでしょうか。

学芸員だった頃は、自分の研究や展示内容、そこに関わる組織のことだけを考えていればよかったのですが、館長という立場ではそうもいきません。資金繰りや企業との提携など、5年前にはここまで広範囲の業務とは想像もできませんでした。ただ、原則は変わらず、今まで通り質の高い展示を続けていきます。

ー　シンガポールでも人気の中国茶のお店「CHAGEE」や、「ユニクロ」とのコラボレーションなど、新しい取り組みをなさっていますね。

クレメントさん　全てチームメンバーのお陰です。彼らにはもう少し「大胆にやってみよう」とだけ伝えています。少なくとも私が館長としてフレッシュなうちは、リスクを取って新しいことに挑戦していきます。失敗から学び、もし成功したら祝えばいい。その中で今回のような企画が益々増えるといいなと。「ユニクロ」は、これまでMoMAやルーブル美術館などとコラボレーションしていましたが、東南アジアでのポップアップストアは当館が初めてで、とても画期的な出来事だと思っています。

ー　新しい展示の企画から実現までどのくらい時間がかかりますか？

クレメントさん　基本的には3年かな。もちろん例外はあります。例えば新型コロナウイルス（COVID-19）の影響で展示がキャンセルとなったように。北京の故宮博物院との企画で、既に覚書も交わしていたのですが、誰も中国への出入国ができず結局実現できませんでした。そこで急遽、館内所蔵品での展示に方向転換し、3、4ヶ月で何とか別の特別展を開催しました。

ー　そんなご苦労もあるのですね。現在ACMでは「Let’s Play」というゲーム展が開催されています。日本の囲碁や将棋なども取り上げられていますが、詳しく教えてください。

クレメントさん　基本的には館長と学芸員が一緒に企画を練りますが、ゲーム関連の展示品は博物館のあちこちにあったので、より現場主導で実現した企画です。実は私がまだ学芸員だった頃から“アジアのゲームがテーマの展覧会をいつか開催したい”と考えていましたが、良い時機がありませんでした。しかしSG60、SJ60という記念すべきタイミングに実現できたのはとても幸運でした。

当館のテーマはクロスカルチャーです。人々が調和・共存するシンガポールという国そのものを反映する博物館です。ゲームは人々を結びつけるものです。背景や宗教、言語が違っても、ルールさえ理解していれば、ゲームを通じて言葉を使わずにコミュニケーションをとり、楽しむことができます。ゲームは非常に異文化が交わりやすいアイテムなんです。たとえば大航海時代、人々が移動する際、彼らは商業や貿易、宗教だけでなく、ゲームのような娯楽や余暇の過ごし方も持ち込みます。すると、移動した土地の文化や好みに合わせてルールを変えたり、駒なども変えたりします。つまり、その多様性と柔軟性こそが文化

交流そのものであり、この博物館の役割にぴったりだと感じました。

それに、ゲームにはルールを考案した人や、ボードや駒を作るアーティストやデザイナーがいます。ボードが折り畳めたり、駒を収納できたり、デザインの集合体のように感じます。

また、ACMの1階ロビーには「Let's Play More」と名付けた小さなコーナーがありますが、実はHDB(注1)のコミュニティスペースから着想を得たものです。

ー　HDB1階のスペースでよく見るテーブルのことですね。

クレメントさん　子どもの頃HDBに住んでいました。そこにはいつも近所のおじさんやおばさんたちが集まっていたのを覚えています。時にはチェスや“ウェイチ”という将棋のようなゲームをしたり、ただ一緒に座ってお喋りをして時間をつぶしたりと、人々を結びつける美しい空間でした。最近ではそういう光景を目にする機会が減ったので、博物館がそうなればと考えてロビーの一角に作りました。

ー　プラナカン博物館は日本人女性にとても人気があります。どうしてでしょう？

クレメントさん　そうですね、正しい答えか分かりませんが、私自身の意見でよければ。

まずその前に両博物館の成り立ちを。ACMとプラナカン博物館は元々一つの博物館でした。1997年にACMが今のプラナカン博物館の場所(旧・道南学校)に設立されました。手狭になったので2003年に今の場所へ移転しましたが、ここではプラナカン(注2)の展示スペースが十分取れず、シンガポールを象徴するプラナカン文化をきちんと紹介するため、移転前の場所に切り出すことに決めたのです。一つの博物館が二つの場所に分かれていると考えて下さい。

さて人気の理由ですが、まず、非常に明るく色鮮やかな文化であるということでしょうか。ファッション、ビーズ装飾、刺繍、陶器、磁器に至るまで、どれもカラフルで、様々な文化が融合しています。例えるなら色々な味が楽しめるチョコレートボックスのようなもの。日本文化もプラナカン文化も、非常に保守的で伝統的である一方、先進的で創造的、アヴァンギャルドな側面があると思います。またシンガポールの日本人コミュニティは他のアジアなどに比べて長い歴史があり、プラナカン文化に自然と慣れ親しんでいるのも、人気の理由の一つだと思います。

ー　プラナカン文化はどのように継承されていくと考えていらっしゃいますか？

クレメントさん　「衰退しつつある文化」「消えゆく文化」と言われますが、私はそうは思いません。今も明確に生き生きと受け継がれています。1階ギャラリーの展示にもあるように、現在のプラナカンの人々のインタビューなど、記録映像も残されています。もちろん、どんなアイデンティティや文化であれ、常に進化し続けるもので、それを受け入れる柔軟性が必要です。昔はシンガポールのような港湾都市のコミュニティに決まりなんてなかったんですよ。服装も料理も、好きなように生活していたんです。ジャカルタ、バタビア、インドのゴア、マラッカ、マニラ、さらには長崎や神戸といったアジアの港湾都市はそういった柔軟さを持っていました。京都や東京のような中心地とは全く違いますよね。

ー　SJ60にあたり、何か企画されたことはありますか？

クレメントさん　先ほどと重なりますが、開催中の「Let's Play」展が、SG60とSJ60の時期が重なったのは幸運なことでした。日本大使館とジャパン・クリエイティブ・センター(JCC)を介して、日本将棋連盟との共催で実現した企画、「漫画の中の将棋」(4月4日～)を開催しています。将棋を最も深く掘り下げた現代漫画として、羽海野チカ氏による漫画「3月のライオン」のシーンを展示しています。

インタビューの様子

数年前に彼らが、初の東南アジア囲碁大会を主催した際、当館が会場パートナーを務めました。その時、アマチュア囲碁棋士の陳奕航(チェン・イーハン)という、わずか8歳の少年が参加しました。4位という結果に終わりましたが、日本や韓国のプロ棋士達の注目を集め、その後イーハンは日本に渡り、数年後には何とインストラクターとなり、今は正式にプロ棋士として認定されました。彼はシンガポールで生まれながら、囲碁棋士としては日本棋院を代表することになります。シンガポールと日本の関係そのものであり、二つの国をつなぐ「架け橋」でもあるのです。

ー　昨年9月にセントーサ島で行われた藤井聡太さんと伊藤巧さんとの「王座戦」では「振り駒」をなさったとお聞きしました。その時はどんなお気持ちでしたか？

クレメントさん　それはもう特別な瞬間でした。振り駒役の機会を与えてくださったJCCと日本大使館に感謝しています。日本を代表する選手たちと同じ空間にいられたのは特別な経験で、初の大役でとても緊張しました。きちんと役目を果たせるように何度もYouTubeの動画を見て練習し、試合前には手順を説明してもらいリハーサルもしました。

王座戦の様子

ー　ところでクレメントさんは語学がとても堪能で、6か国語を話されるとお聞きしました。

クレメントさん　シンガポール人にとっては英語と北京語は必須です。加えて私の家族は潮州系中国人なので潮州語、兵役中に上達した福建語、また祖母が香港映画やドラマが好きで、自然と広東語も分かるようになりました。専門学校と大学では日本語とイタリア語を専攻したので、どちらも自信があります。専門用語は少し難しいけれど、英語、中国語、日本語とイタリア語は普通に話せます。

ー　イタリア語も話せるのですね。

クレメントさん

数年前の展示企画に必要で、スペイン語とポルトガル語も話せるようになりました。どちらもイタリア語とよく似ている言語なんです。今でも簡単な注文や買い物くらいならできます。

インタビューの様子

ー　外国語をマスターするコツなどあればぜひ教えてください。

クレメントさん　沢山聞いて沢山話す。失敗するのを恐れないこと。自転車は、一度も転ばずに乗れるようになる人はいません。必ず転んで、膝を擦りむく。それを繰り返して初めて、バランスの取り方を学びますよね。言語も全く同じです。間違った文法や単語を使うのが恥ずかしいからと、最初から完璧に話そうとすると、頭で考えるばかりで言葉が出てきません。まずは“自転車で転ぶ”ことです。

イタリア語はシエナの大学で勉強したのですが、その時の教授が、クラス内の会話はイタリア語のみ、と徹底していました。英語の質問は無視されます(笑)。

その言語で音楽を聴いたり、小説を読んだり、友達を作ることも大事かな。日本語については、妻にも感謝しています。家では主に日本語を使っているので。

ー　日本に対する想いをお聞かせください。

クレメントさん　日本は大好きな場所です。伝統文化から現代のポップカルチャーまで、幅広く最新情報をチェックしています。シンガポールと日本、そして私個人としても、まだできることや互いに学び合えることはたくさんあると思います。アジアについて語るには、日本が歴史上果たしてきた役割抜きに語ることはできません。

また、囲碁が大好きです。結婚前にも日本のプロ棋士からアマチュア棋士まで、多くの友人と出会いました。今もなるべく日本に戻り、囲碁サロンに2週間ほど通うようにしています。最近はなかなか難しいですが、これはある種の贅沢な悩みですね。

ー　釣りがお好きで、好物はアユの塩焼きと伺いました。

クレメントさん　はい、今でも釣りもアユの塩焼きも大好きです。ただ食べ物でいえば、納豆と梅干しがちょっと苦手です。

ー　では最後にこの記事を読まれる日本人会の皆さんへのメッセージをお願いします。

クレメントさん　ぜひ博物館にもっと足を運んでください。シンガポールの日本人コミュニティの方が、この博物館を「共感できる場所」と感じてくれたらとても嬉しいです。この博物館は、世界中にルーツを持つ先祖の文化を称え、広く伝えるために設立されました。この場所を「拠点」として捉え、アジアの各地域を理解するための場として親しんでいただければと願っています。

インタビュー後記

それぞれの質問に対する丁寧で真摯なお答えとその熱量がとても印象的でした。チームメンバーに「大胆に」と言える懐の深さと、現場の声を大切にするリーダーでいらっしゃることが、素晴らしい企画に繋がっていることがよく理解できました。インタビュー後には、奥様とのお話を通して、プライベートな一面も垣間見えたり。日本と関わりの深い方が館長を務めるACMとプラナカン博物館、今後の展示が益々楽しみになりました。

注1)HDBはHousing & Development Boardの略でシンガポール政府が供給している公営住宅のこと

注2)プラナカンはマレー語で「その土地で生まれた子」を意味し、数世紀前に東南アジアにやってきた外国貿易商たちと地元の女性が結婚して、その間に生まれた子孫たちのことをさす呼び名

文責・画像：南十字星編集委員　編集部
西山ひろみ、黒田可奈

アジア文明博物館
MRTラッフルズ・プレイス駅から徒歩５分
日本語ガイドあり

プラナカン博物館
MRTシティホール/ブラス・バサー/ベンクーレン駅から
徒歩10分
日本語ガイドあり

※各博物館の写真は各博物館公式サイトよりお借りしています。

（左から）黒田可奈さん、クレメント・オンさん、西山ひろみさん